

目 次

Find Someone Who	vii
刊行に寄せて	ix
序 章.....	1
0.1 日本の英語教育の現状と問題点	1
0.2 個性を生かした多重知能理論(MI 理論)と英語・外国語指導法.....	3
0.3 本書の目的と構成.....	4
第 1 編 理論編	
第 1 章 英語教育と学習者の興味・関心.....	7
1.1 日本の英語教育改革に必要なこと	7
1.2 英語学習に対する興味・関心と理解.....	8
1.3 韓国の興味・自信・関心.....	14
1.4 ヨーロッパの学習者の動機・興味・関心.....	16
1.5 4 技能の統合的育成.....	21
1.6 英語での授業.....	23
1.7 まとめ.....	24
第 2 章 Multiple Intelligences 多重知能 (MI) 理論の概観.....	27
2.1 MI 理論の定義と基準	27
2.2 8 つの知能の特徴.....	31
2.3 MI は遺伝か、環境か？	34
2.4 MI 学習法に基づく理解のための指導.....	34
2.5 まとめ.....	35
第 3 章 外国語学習における言語適性と MI.....	37
3.1 外国語学習における言語適性と IQ.....	37
3.2 学習スタイルと MI 理論.....	40
3.3 学習方略と MI 理論.....	43
3.4 BICS と CALP	44
3.5 情動(感情)的要因と親子言語相互交渉	46
3.6 外国語学習と情動.....	47
3.7 まとめ.....	49

第4章 人間の脳と外国語学習	51
4.1 人間の脳の働きと4つのスキル	51
4.2 記憶と脳の働き	54
4.3 情動と脳の働き	58
4.4 文法とブローカ野の機能	60
4.5 左脳と言語中枢	62
4.6 文の理解とウェルニッケ野の機能	62
4.7 まとめ	64
第5章 英語・外国語教授法の変遷と文法指導—ディベート活動の効果—	67
5.1 英語・外国語教授法の変遷と動向	67
5.2 文法指導の役割	73
5.3 文法の指導法	75
5.4 まとめ	77
第6章 MI理論と英語・外国語指導法—小学校から大学まで—	81
6.1 英語・外国語教授法におけるMI理論の発展	81
6.2 得意な知能を知る方法	82
6.3 MI理論を生かした外国語指導の事例	83
6.4 MIと結びつく職業と英語・外国語活動	85
6.5 MI理論と心の構成	89
6.6 MI理論を生かしたケイガン&ケイガンの英語指導法	90
6.7 MI指導が教育上重要な理由	92
6.8 まとめ	94
第7章 理解のための外国語学習・指導の7つの原理	95
7.1 理解とは何か	95
7.2 コミュニケーションとは何か	96
7.3 理解のための入口と英語・外国語指導	97
7.4 理解のための指導の基本的要素	99
7.5 言語獲得理論とMI理論	101
7.6 理解のための外国語学習・指導のための7つの原理	102
7.7 MI理論と協同学習	104
7.8 まとめ	105

第2編 実践編

第1章 MI理論の観点からみる教育目標と語彙指導.....	109
1.1 「個性化教育」とは何かー学習指導要領における教育目標とMI理論の相違.....	109
1.2 外国語としての英語指導語彙数の国際比較.....	113
1.3 語彙数と4技能の関連性.....	114
1.4 外国語としての英語語彙学習と指導法.....	115
1.5 まとめ.....	119
第2章 リーディング・読解のための指導法.....	121
2.1 リーディングの目的と指導法.....	121
2.2 リーディングにおける理解のための学習方略の指導.....	125
2.3 MIと五感を用いた読解のためのトピック重視の実践例.....	127
2.4 MI使用と協同学習についての学習者の反応.....	130
2.5 MI理論に基づくリーディング教材.....	131
2.6 言語的知能・音楽的知能・視覚・空間的知能とリーディング教材.....	134
2.7 まとめ.....	135
第3章 ライティングのための指導法.....	137
3.1 ライティング指導における課題と問題点.....	137
3.2 リーディングがライティングに与える影響.....	137
3.3 パラグラフ・ライティング.....	139
3.4 プロセス・ライティング.....	140
3.5 フィードバック・添削指導.....	141
3.5.1 文法修正に効果はあるか、ないか？.....	141
3.5.2 なぜ文法修正に効果がないのか？.....	142
3.6 文単位の和文英訳とパラグラフ・ライティング.....	144
3.7 正確さと流暢さ.....	144
3.8 語彙の豊富さ.....	145
3.9 ライティング指導における課題と問題点.....	145
3.10 MI・8つの知能とライティング活動.....	146
3.11 MI理論に基づくディベートからライティングへ.....	148
3.12 学習者に対する評価とポートフォリオの導入.....	148
3.13 まとめ.....	152

第4章 リーディングとライティングの統合的指導法.....	155
4.1 リーディングとライティングの関連性.....	155
4.2 リーディングとライティングの実践例.....	156
4.3 リーディングとライティングの調査結果と考察.....	158
4.4 ループリックを用いたライティングからリーディングへの学習者の反応.....	166
4.5 まとめ.....	167
第5章 MI理論と4技能の統合的指導法.....	169
5.1 理解と統合的指導の必要性.....	169
5.2 理解のための統合的指導の目標設定.....	169
5.3 7つの原理に基づく統合的指導とグループ活動の問題点.....	173
5.4 7つの原理に基づく統合的活動とディベートの効果.....	174
5.5 ディベート活動に対する学習者への評価.....	179
5.6 まとめ.....	180
第6章 MIを生かした協同学習と統合的指導法.....	183
6.1 MIを生かした指導法.....	183
6.2 MI理論に基づく協同学習の心得.....	183
6.3 言語的知能と4技能の統合的活動.....	186
6.4 論理・数学的知能とリーディング活動.....	187
6.5 論理・数学的知能、視覚・空間的知能、博物的知能の組み合わせと 4技能の統合的活動.....	189
6.6 音楽的知能・身体運動的知能とリスニング&スピーキング活動.....	193
6.7 博物的知能・視覚空間的知能と英語教材.....	196
6.8 対人的知能と内省的知能の英語教材.....	198
6.9 まとめ.....	200
参考文献.....	201
索引.....	211
あとがき.....	212

Find Someone Who ...

ID Name

[I.] Get out of your seat and find the classmate who fits each description. When you find someone who fits a description, ask him or her a question. Have him or her sign, or write his or her name next to the description, and put a check in the (). Try to find a different classmate for each question. When you are all done, help classmates find each other.

1. () Can sing well. What do you sing?
2. () Likes working together in group projects. Can you benefit from interactions with others?
3. () Wants to be a musician. What musical instrument can you play?
4. () Likes to play a sport. What's your favorite sport?
5. () Likes to dance. When and where do you dance?
6. () Likes to work with his or her computer. How did you learn to use the computer?
7. () Likes art appreciation. Do you think about elements of art like color contrasts?
8. () Wants to be a politician. Who is your favorite politician?
9. () Likes math. Why do you like math?
10. () Likes listening and speaking in English. Do you like reading in English?
11. () Likes reading and writing in English. Do you think about word meaning?
12. () Always reflects your attitude and expression on what you did. Why do you like to do so?
13. () Likes categorizing, analyzing, and applying. What things do you like to think about?
14. () Likes to draw. What do you draw?
15. () Wants to be an architectural engineer. What architecture do you like to design?
16. () Likes music appreciation. Who is your favorite musician?
17. () Wants to be an athlete/a sportsman. What sports can you play?
18. () Wants to be a natural scientist. Do you want to be a zoologist or a botanist?
19. () Likes to talk with people. Do you like to be a salesperson?
20. () Likes animal husbandry/care. What animal do you like best?
21. () Knows oneself about his or her strengths and weaknesses. What's your strength?

[II.] 自分が最も得意とする科目は何ですか。前の()に○印を入れてください。
また、その科目で、優れているものは何ですか。後の()の中のものを○で囲んでください。

- () 英語(読む, 書く, 話す, 聞く, 文章構成, 文法の規則性, 語彙の暗記)
- () 国語(読む, 書く, 話す, 聞く, 文章構成, 漢字, 詩)
- () 数学(理論, 分類, 分析, 推論, 計算, 幾何, 代数, コンピューター, 問題解決)
- () 音楽(歌, リズム, 作詞, 楽器演奏, 音楽鑑賞)
- () 絵画・建築(絵を描く, デザイン, 建築設計, 絵画鑑賞, 建物)
- () 体操(運動競技, ダンス, キャンピング, 山登り, スポーツ鑑賞)
- () 理科・生物(自然科学, 動物を飼う, 植物を育てる, 自然科学, 気象現象)
- () 社会・対人関係(人と対話, グループ活動, ディベート, ゲーム)
- () 心理学(自己認識, 感情抑制, 責任感, 向上心, 自己反省)

[III.] 将来どんな職業につきたいですか。()

(I は Kagan & Kagan, 1998, pp.8.53. - 8.55 参照, 林桂子作成)

刊行に寄せて

本書は、多重知能(MI)理論を応用した日本の英語指導法の理論と実践を取り扱っています。本書の刊行に際して、MI理論の提唱者、Howard Gardner(ハワード・ガードナー)先生より、次のようなメッセージを賜りました。

I now understand that MI can be useful in teaching foreign languages. I have now come to the conclusion that there are no 'approved' or 'disapproved' ways of using MI to teach languages, or, indeed, anything else. MI is a theory of how the mind developed over time and is organized today. Like other theories, it can be used properly in many ways by different authorities, including teachers. A language can be used as a natural accompaniment to almost any activity. So you can introduce appropriate use of language while the person is making music, playing a game, engaged in commerce, watching a movie, etc. In that way language use is enhanced by activities that involve one or more intelligences. One of the most challenging aspects of learning a language, particularly as an older person, is understanding structures that do not exist in your native language. For example, English is not marked for cases, while most other Indo-European languages are. MI approaches can be useful in conveying to a person the idea of a case, and how to express it in a new language. That is because any concept can be captured in a number of ways—in words, in diagrams, in examples, through dramatic enactment, through bodily motion etc. I think that this aspect of language learning is particularly susceptible to imaginative MI uses. I write a good deal about this in chapters 7-9 of my book THE DISCIPLINED MIND.

Howard Gardner

April 2, 2010

人にはIQだけでなく、多重知能が潜在的に備わっているとするMI理論は、海外の学校や実業界のさまざまな分野で使われていますが、日本の学校教育や英語教育界では、認識を深められないまま、ほとんど使われていないようです。上記のメッセージにおいて、Gardner先生は、現在の自分の理解ではMI理論が外国語指導に応用できるとされています。MI理論は、人間の心がどのように発

達してきたのか、今日においてそれがいかに系統立てられるかを取り扱うものであり、さまざまな分野で活用できます。MI を外国語指導に使うためのさまざまな具体的方法も提案されています。

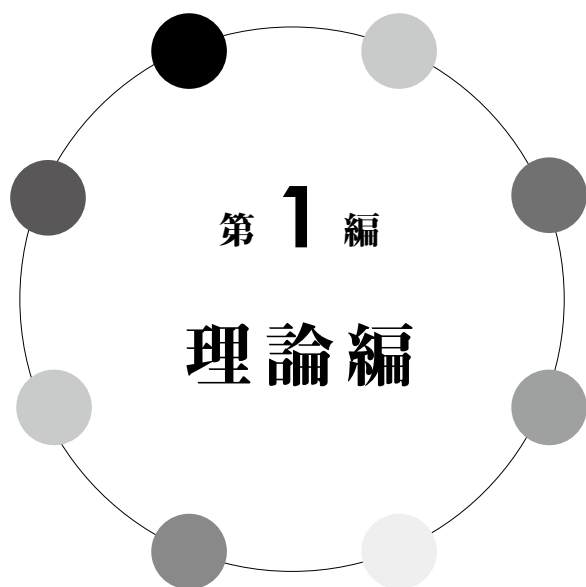
Gardner 先生には、上記のメッセージの他に、多くの質問にも明快にお答えいただきました。さらに、MI 理論については、Howard Gardner 著 *Intelligence Reframed: Multiple Intelligences for the 21st Century* の訳者である関西大学教授の松村暢隆先生より温かいご指導を賜りました。また、MI 理論の実践に関しては、Spencer Kagan 先生ならびに Rob Jutras 先生には、数回にわたり、ワークショップでご指導を賜りました。先生方には厚く御礼申し上げます。

2009(平成 21)年に、和歌山大学教育学部附属小学校の「教育研究発表会」に英語活動助言者として参加した際に、偶然にも、Gardner 先生を東京大学へ講師として招聘された東京大学大学院教授の佐藤学先生が同小学校の「学びの質の高まりを目指して」の指導教官であることを知りました。佐藤先生は『質の高い学びを創る授業改革への挑戦—新学習指導要領を超えて』(2009)の中で、「新学習指導要領は、学力問題、特に PISA 調査による国際ランキング競争とマスメディアによる危機宣伝に振り回され、一面的な対応しか示していない」(p.12)ことを指摘され、協同的な学びを強調しておられます。同書の中で、同小学校校長の松浦善満先生が、Lev. S. Vygotsky(1896–1934)の「発達の最近接領域」を取り上げ、協同学習の重要性について指摘しておられます。協同学習は、ことばの理解と 4 技能の向上には欠かせない指導法です。外国語教育に MI 理論を導入することは、人の多様性を認め、尊重し、協同学習によって深い理解とコミュニケーションの質を高めることになります。

本書の構想にあたり、関西外国語大学名誉教授の藤井健夫先生には、脳科学の分野他、多くの資料をご提供いただきました。関西大学教授の奥田隆一先生には、資料の提供と励ましを頂戴しました。また、刊行に際して、くろしお出版編集部の斉藤章明さんにはすべての原稿にお目通しいただき、多大なるご尽力を賜りました。なお、「多重知能理論を応用した外国語指導法」の研究については、平成 17–18 年度科学研究費補助金(萌芽研究)(課題番号 17652063)を受けております。以上の方々に心より感謝申し上げます。

2011 年 8 月

林 桂子



第1章

英語教育と学習者の興味・関心

1.1 日本の英語教育改革に必要なこと

文部科学省(2009c)は、2009年度に16億2,400万円の予算を投じて「英語教育改革総合プラン」を作成しました。その主な内容は、(1)英語教育の低年齢化を推進する、(2)『英語ノート』を配布する、(3)教員資質を向上させる、(4)英語学習に興味・関心を持つ児童・生徒の割合を80%以上、理解・習熟度について60%以上にまで引き上げる、ということを目指したものでした。しかし、政権交代によって、行政刷新会議でその改革総合プランはあっけなく廃止されました。「教員免許更新制」も2011年度の講習をもって廃止されます。「日本の英語教育改革」に関して、「英語教育リレーコラム」に、渡邊(2004)は、(1)英語教員自身が英語を使える日本人であること、および(2)小学校から英語教育を始めることを挙げています。教員資質の向上のためには、画一化した教育ではなく、学習者を顧みて、それぞれの興味・関心および理解の向上に向けて、個々の能力やニーズにあった学習環境の提供および指導法の影響を考える必要があるのではないのでしょうか。本章では、まずは日本の英語教育改革について述べ、次に、日本と世界の英語学習者の興味・関心についての比較、「4技能の統合的育成」と「英語で授業」を扱うことにします。

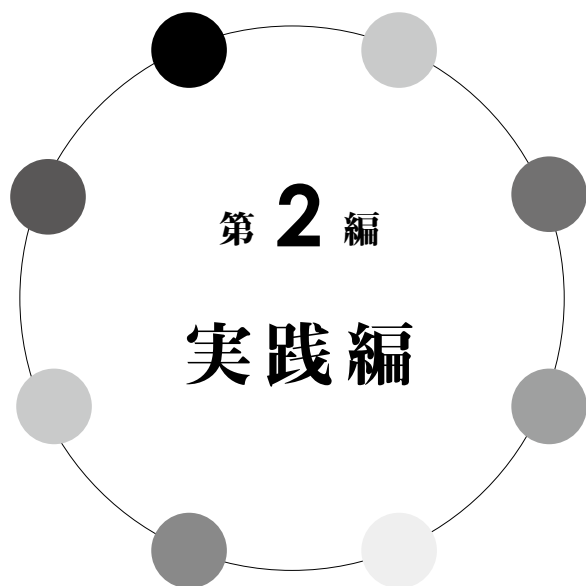
序章で述べたように、現在の日本の英語教育といえば、「TOEIC!」と指導者が一斉に声を上げるほど、教材からテストに至るまでTOEIC中心の指導が行われています。1998年にTOEIC受験者は累計500万人、2002年には1,000万人を突破しました。企業からの受験者も多数いますが、IP(学校)テストで学校団体の受験者も多くいます。2002年7月に文部科学省が『英語が使える日本人の育成』戦略構想を作成して、学習者および教員に対して数値目標を掲げて以来、ますます増加傾向にあります。指導者や学習者は、文科省が掲げた到達目標に近づくために、TOEICの点数を上げようと必死になっています。

企業で働く社会人を対象としたTOEICの結果では、高卒・大卒に関係なく、英語学習経験が長い人ほど得点は高くなっています。因みに、2010年公式データ(国際ビジネスコミュニケーション協会、2011)では、10年以上の学習経験

3.1 外国語学習における言語適性と IQ

第2章では、MI理論の定義と基準および特徴などの概観を述べました。MI理論を応用した外国語指導法では、個人のそれぞれの知能が外国語学習における個人差の要因とどのように関連しているかについて考える必要があります。個人差の要因として、言語適性、学習スタイル、学習方略などの研究があります。さらに、第2章で触れたように、IQが言語適性と関連するかどうかについても検討します。アメリカやカナダの大学や大学院へ入学する場合には、一般的な適性、専門分野の基礎学力、英語の文章力と分析的思考力を見る大学進学適性検査として、SAT(Scholastic Assessment Test)の実施やGRE(Graduate Record Examinations)スコアの提示が求められます。いずれのテストも、思考、言語的能力、数学的能力を含む伝統的な知能検査、すなわち、IQテストとよく似ていると言われています。これらのテストに合格しなければ、たとえそれぞれの分野の学習動機や潜在能力があっても、大学や大学院に入学できないことになります。このようなIQとの関連性も含めて、本章では、外国語学習における言語適性、IQと言語適性との関連性、学習スタイルおよび学習方略についてMI理論の観点から考察します。

外国語学習の言語適性の中には、音声識別・符号化能力(phonemic coding ability)、文法的感受性(grammaral sensitivity)、帰納的・言語分析能力(inductive language analytic ability)の3つの要素が含まれています(Carroll, 1973)。音声識別・符号化能力は言語の音声を記憶する能力を意味します。文法的感受性は、文法の規則を意識的に知っている能力です。帰納的・言語分析能力は、言語資料を吟味する能力、意味形式と文法形式のいずれかと対応するパターンを認識する能力を意味します。このテストでは、発音、文法、暗記力に焦点をあてていますが、言語運用能力について素質があるかどうかはわからないようです。Carrollの言語適性に注目し、およそ30年後に、Skehan(1998)が、音声識別能力(phonetic coding ability)、言語分析力(language analytic ability)、記憶力(memory)の3つの要素を挙げ、特に、記憶力の重要性につい



第1章

MI理論の観点からみる教育目標と語彙指導

1.1 「個性化教育」とは何か—学習指導要領における教育目標とMI理論の相違

第1編では、個人の得意な知能を生かすMI理論を英語・外国語指導に応用できる可能性について、理論的側面から個人の特性と一般的特性の分野を検討しました。個人の特性については、学習者の興味・関心・理解、言語適性、学習スタイルなどを検討し、一般的特性については、脳の働き、外国語教授法の変遷、理解のための指導法などについて検討しました。第2編では、MI理論を応用した協同学習による統合的指導法について実践的指導の側面から検討し、4つのスキルを向上させるための指導法を紹介します。本章では、学習指導要領における教育改革および外国語科の教育目標と指導内容の変遷を取り上げ、教育目標の中核となる「個性を生かす教育」の概念について、学習指導要領が目指す内容とMI理論が目指す内容の違いを考察し、指導内容の厳選によって削減された指導語数が外国語教育に及ぼす影響について検討します。

学習指導要領は10年ごとに改定され、教育目標と指導内容は時勢の流れに沿って変化しています。戦後から今日までの英語・外国語教育の流れの中で比較的近年に変化したものとして、およそ50年間にわたり選択科目であった英語が必修科目になったことが挙げられます。英語は選択科目のときから実質的には必修科目と同じように扱われており、日本の外国語教育は英語一辺倒でした。しかし、英語が必修科目となった後も、英語力の低下が叫ばれています。英語力に影響を及ぼしているのは、1976年代以降、改訂の度に教育目標が「個性を生かす教育」を基盤に「ゆとり教育」「生きる力」となり、学力の向上とは逆の方向へ変化して、授業時数や指導語数が大幅に削減されていることです。学習内容の削減に至った教育目標の変遷を辿りながら、MI理論の観点から「個性を生かす教育」とは何をすべきかについて考えてみましょう。学習指導要領の告示および実施年は、中学校の英語・外国語教育課程を中心に述べます。

学習指導要領¹⁾は、1947(昭和22)年から1953(昭和28)年までは、英語編(試案)となっており、連合国軍の司令下にありましたが、英語教育の目標は、英語で考える習慣を作ること、聞き方と話し方は英語の第一次の技能(primary skill)

第2章

リーディング・読解のための指導法

2.1 リーディングの目的と指導法

リーディングの目的は何でしょうか。リーディング，すなわち，読む目的は情報を得ることであり，その意味内容を知ることです。では，リーディングにおけるコミュニケーションとはどのようなことを意味するのでしょうか。

効果的なリーディングのためにさまざまな指導法が考案されています。しかし，どの方法が効果的であるかは，学習者のレベル，学習目的，教材・課題によって異なります。中学校のリーディングの授業では，英語という未知の外国語の言語構造を通して，読み方を教わります。中学校1年の学習初期からいきなり文法について説明されると学習者は戸惑ってしまいます。苦手意識はそのようなことから生じてきますので，学習者のレベルに合わせた指導法が大切です。読解指導法には次のような方法が考案されています。

1. 精読(intensive reading)－1語1語訳し，細かいところまで読む。
2. 速読(faster reading)－普通より速く読む。
3. 多読(extensive reasing)－たくさん読む。
4. スキミング(skimming)－すくい読みして概要を把握する。
5. スキャニング(scanning)－必要な情報を素早く見つけ出す。
6. ジグソー・リーディング(zigsaw reading)－文やパラグラフのばらばらの情報を並べ替えて統合する。
7. シャドーイング(shadowing)－CDや読んだ人の後を辿りながら読む。
8. リード・アンド・ルックアップ(read and look up)－数行の英文を数秒間で読んだ後，顔をあげてテキストを見ないで声に出して言う。
9. ストーリーテリング(story-telling)－物語をグループで語り継ぐ。
10. セマンティック・マッピング(semantic mapping)－概要を意味図で表す。
11. 要約・概要(summary)－要約する。
12. 音読(read aloud)－声に出して読む。

いずれの読み方も読む目的，教材の難易度，学習者のレベルなどによって異なります。それぞれの読み方について簡単に説明し，必要に応じて実践例を挙げておきます。

第3章

ライティングのための指導法

3.1 ライティング指導における課題と問題点

ライティング能力は、日本だけでなく、世界の国々においても、リーディング、リスニング、文法などの言語スキルの能力と比べてもっとも低くなっています。ライティングは、語彙、文法、文章構成が問題となりますが、さらに、アイデアを生み出し、自分の意図をいかに適切な文章構成で人に伝えるかという思考の過程でもあり、他のスキルよりも難しい作業の1つです。それゆえに、いかに指導するかが問題となります。本章では、4技能および文法とライティングの関連性、パラグラフ・ライティングの構成、フィードバック・修正のあり方、語彙の影響、8つの知能とライティング活動、MI理論に基づくディベートからライティングへ、ポートフォリオの導入について検討します。

ライティングといえば文法が問題となります。第1編第1章表1.6を見ると、上位のスウェーデンからオランダ、そしてスペインにおいても文法能力にほとんど差がないのですが、スペインのライティング能力は極端に低くなっています。デンマークは文法能力が低くとも、ライティング能力はフィンランドやオランダと同じです。したがって、文法能力が高ければライティング能力も高くなるとは限らないということです。ライティング能力が高い国は、リーディング能力やリスニング能力が高くなっています。フィンランドのように英語を聞く機会が少ない場合は、リーディングに重点をおく場合もあります。

同じく第1編第1章表1.11の4つのスキルの関連性を見ると、ライティングは、リーディングともっとも高い相関性($r=.8$)があります。そこで、リーディングがライティングにどのような役割を果たしているかを検討する必要があります。

3.2 リーディングがライティングに与える影響

英作文の評価は、一般に、内容(content)、文章構成(organization)、文法(grammar)、語彙(vocabulary)、綴り・句読点(spelling)に重点がおかれています。それぞれの配分はテストや論文・ジャーナルなど、ライティング能力を